



県選択無形民俗文化財

● やきもち踊り

(伊那市)

伊那市山寺の白山社・八幡社合殿の例祭で毎年4月に行われる。江戸中期に伊勢参りに行った人たちが踊りを習って帰り、奉納したのが始まりとされる。祭りのクライマックス、踊りの最後まで境内に残ると疫病にかかるという言い伝えから、踊り手が一齐に境内から逃げ出すユニークな祭りで、県選択無形民俗文化財に指定されている。

祭りは「当屋」と呼ばれる当番が主催し、昔は村の有力者が務めていたが、現在は山寺の7町内が持ち回りで担当している。「やきもち踊り」の名称は、「焼餅がはらんで」という踊りの歌詞や、逃げ遅れると「厄を背負う＝厄持ち」になるという言い伝えに由来するとされる。

祭りが始まると、羽織はかま姿の男衆が輪になり、手や足を大きく振り上げ、跳ねるように踊る。前踊り、中踊り、後踊りがあり、その合間に酒盛りが行われる。約30人の踊り手は焼きアユをさかなにどぶろくを酌み交わし、きせるで刻みたばこをふかす。

最後の後踊りが終わると、いよいよクライマックス。踊り手たちは白足袋のまま一齐に駆け出し、一目散に境内の外へ。逃げ遅れて疫病にかかることがないように先を争って鳥居をくぐっていく。



所在地
1973年3月30日指定
伊那市山寺2017
白山社・八幡社合殿